

8 運営指導委員会およびアドバイザー会議

(1) 第1回運営指導委員会

①日時 令和元(2019)年8月20日(火) 13:30 ~ 15:45

②場所 佐野高校校長室

③参加者

a 運営指導委員

- ・立教大学 副総長 池田伸子氏
- ・国立極地研究所 副所長 伊村智氏
- ・目白大学人間学部児童教育学科 教授 田尻信壹氏

b 本校：校長、事務長、高校教頭、中学教頭、主幹（SGH推進部部長）、高校教務（記録）

c 県教育委員会

- ・栃木県教育委員会事務局高校教育課 副主幹 山下拓男
- ・栃木県教育委員会事務局高校教育課 指導主事 吉川知宏

④協議（説明・質疑）

a 栃木県教育委員会より

- ・「栃木県教育振興基本計画2020」について
来年度の完成を目指して、施策体系の15の基本施策の1、(小中高一貫した英語教育)7(地域についての理解)、9(グローバル化への対応)、10(社会参画)に今年度は特に力を入れていきたい。
- ・「高校生学力向上総合支援事業」について
- ・「グローバル人材育成事業」について
- ・「新たな学びに向けた指導体制強化事業」について
- ・「ALT活用事業」について→25名から30名へ増員。ディベートやプレゼンテーション等の高度な言語活動を充実させ4技能の育成、特に「発信力(speaking、writing)」の強化を図る。

b 佐野高校におけるSGH事業について（本校より）

- ・PDA 全国高校 即興型英語ディベート合宿・大会 課外授業の部(初心者) 優勝
- ・英検準1級合格者の増加
- ・本校のSGH構想の確認。田中正造型、ローカルからグローバルへ（「地域の課題解決」から「世界の課題解決」へ）
- ・中学校での取組の高校での効果が出ている。中学3年間のグローバルアプローチや中3での本格的なシンカゼミのスタート。そして、中3CTPでの「英語によるグループプレゼンテーション」と「英語ディベート」を実施している。
- ・本校の方向性として、中高一貫教育校となって以来、「国際人として活躍できる真のリーダーの育成」を学校目標として先進的に教育諸活動に取り組んできた。文科省も2014年度から「将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成」を目標にSGHを始め次年度で終了となる予定だが、本校は開校以来（国の施策とは別に）先進的にグローバル教育を推し進めており、文科省の動向に関わりなく、これまで同様、ぶれることなく教育諸活動を進めていく。

c 質疑等

- ・ディベートが活発で大変驚いた。着実に成果が出ている。SGH 指定終了後もぜひ継続して行ってほしい。授業等で皆が取り組んでいるのも素晴らしい。
- ・日本語でのディベート指導の状況はどうか。国語や社会でも実施できるし重要だと思われる。→無論非常に重要である。本校では高1の2学期にCTPの授業で全生徒が体験している。中学2年でも実施している。

d 平成30年度事業計画及び実施状況について

- ・佐高のSGHプログラムの良さは、(比較的)多くの学校で実施できることである。生徒の多くが飛び抜けた学力を持っていたり多くの生徒が海外経験があったり等の特徴のある学校でなくても可能である。
- ・Output(実施してきたこと)は十分であると思うのでOutcome(社会的な影響、広がり)を意識していきたい。
- ・「TOBITATE」の実績(佐高は3年連続代表を輩出、今年度は2名)を使う。学力に捕られないチャレンジ力を表す指標である。

(2) 第2回運営指導委員会およびアドバイザー会議

①日時 令和元(2019)年12月13日(金)14:45～16:15

②場所 佐野高校校長室

③参加者

a グローバル教育統括アドバイザー

- ・東京海洋大学グローバル教育研究推進機構教授 小松俊明氏
- ・宇都宮大学国際学部教授学長補佐 松金公正氏

b 運営指導委員

- ・国立極地研究所副所長 伊村智氏
- ・目白大学人間学部児童教育学科学科長 田尻信壹氏
- ・株式会社あしぎん総合研究所代表取締役社長 加藤潔氏

c オブザーバー

- ・栃木県教育委員会事務局 総務課 主幹 青柳育夫氏

d 校長、事務長、高校教頭、中学教頭、主幹(SGH推進部部長)、高校SGH推進部副部長、中学SGH推進部副部長

e 栃木県教育委員会

- ・栃木県教育委員会事務局高校教育課 課長補佐 山下拓男
- ・栃木県教育委員会事務局高校教育課 指導主事 吉川知宏
- ・栃木県教育委員会事務局高校教育課 指導主事 相馬学

④協議(説明・質疑)

a 栃木県教育委員会より

- ・生徒は着実に力を身に付けている。進学実績にも表れている。県内に広げる。
- ・来年度は完成年度、検討すべきことを明らかにする。

b 佐野高校におけるSGH事業について(本校より)

- ・本校は中高一貫教育校となって以来「海外G研修(カナダ)」、「台湾修学旅行」、「CTP」等を行ってきており、こうしたことはSGHの指定後も自然に続くと考えられる。言ってみれば本校は(SGH指定の)「前もSGH、後もSGH」である。
- ・公害災害の分野は佐野が被災したこともあり、とても大切な分野である。
- ・1年地域課題研究、2年異文化研究、3年キャリアパス探求(何が分かって、何が

分からなかったか。自分の興味は何か。将来研究を続けていくのか。)などをシンカ宣言として英語でまとめる。

- ・本校の考えるグローバルリーダーの資質・能力6つの力を数字で示すのに苦慮している。論理力に関しては、若山先生のクリシンテスト、協働力に関してはGPSアカデミック等で示している。発信に関してはアンケート、英語力に関してはGTEC、英検、debate、トビタテの合格(2名)等で示したい。また、トータルな人間像(中間評価で指摘)も描く工夫をしたい。
- ・ラグビー部の環境への取り組みが顕著である。
- ・SGH クラブ研究班国内班、初年度から、福島⇒水俣⇒北海道⇒福島。災害をテーマにフォーラムに参加した。里山研究で宇都宮大学生と茂木視察を実施した。
- ・SGH クラブ海外班、3年連続で台湾に行き、今年度はマレーシア・サラワク州を研修地とした。
- ・SGH ディベート班、即興型ディベート合宿大会で全校優勝等、各大会で活躍した。英語で討論する力を鍛えている。本校主催のディベートセミナー、ディベート大会等を実施した、
- ・SGH フランス語班、東日本スケッチ暗唱コンクール審査員特別賞(5~7位)で7位入賞し、パリ祭を開催した。
- ・環境教育講座(東京農工大佐藤先生)⇒佐野小出前授業を実施中である。
- ・先生方の課題研究の研修、ポスター作成の研修を実施した。

c 質疑等

- ・6つの力については、最終年度の成果に合わせて整理する。学際的なアプローチで横に広がっている面がある。SDGsでは漠然としている。今まではSDGsを出せばよかったが、これからはもっと具体的なものを出さないとだめ。3つぐらいにして、SDGsのどれに対応するのか説明の仕方を考えるとよい。整理して、カリキュラムを横断的なものに絞る。
- ・留学センターのようにイギリスにこういう留学先があるとか説明するとよい。学年が遅れない保障もあるとよい。
- ・外部の資金を取り行くことが大切。グループ研究の成果は指導者によるところが多い。その後、一人でやる選択肢があることを示す。
- ・トビタテに合格するには、提案がいかにか个性的であるかが大事。付加的形での活動を見るとよい。英語力だけではない個人の主張など。留学から帰国後の活動の場を与えられるかどうか。
- ・新潟のある高校では、教師集団が変わって、学校が変わったところがある。それが本校にもあるのではないか。前からいる教員は気づきにくい。
- ・研究とじっくり考察する時間が短いように見えた。結論に行くまでの時間が欲しい。結論を急いで出している。(2年生は7月中間発表、9月領域別発表となっているため)
- ・県内でこの活動を展開してほしい。他の高校生を引っ張ってほしい。生徒に還元の間を与えるとよい。
- ・以前と比べ変化が目覚ましい。前はポスターを作るのが間に合わないくらいであった。今回生徒が分かりやすく説明してくれた。自分の言葉で説明しているのでわかりやすかった。
- ・評価を学校全体でつけていったか。一人ひとりがどういう力をつけていったか検証するとよい。分野別に常に測れるものが良いのではないか。一人ひとりの能力が測れるルーブリックがあるとよい。その取り組みをしている学校がある。